

リーダーシップチャレンジ in 台湾に参加して

愛媛大学法文学部人文社会学科法学・政策学履修コース二回生 本佳奈子

目次

1. はじめに
2. 研修内容
3. 研修全体を通しての学びと感想
4. 終わりに

1. はじめに

まず、私がリーダーシップチャレンジ in 台湾に参加した動機について述べたいと思う。動機は以下の3つである。

- ① 国際的な視野を学ぶため
- ② 人前で話すスキルを上達させる機会を欲していたため
- ③ 英語を使ったコミュニケーション能力を上達させるため

まず、①について述べる。私は、グローバル化が進む社会を生きていくために、異なる国の文化や考えについて知ることが大切だと考えていた。本で読んで知識を蓄えることも大切だが、実際に生活を共にし、コミュニケーションをとることでより視野を広げることが出来るのではないかと思い、このプログラムに参加することにした。

次に、②についてである。私が昔から苦手としていることに、人前で話すことがある。大学での授業を通して、人前で話すスキルを学び、実践する機会を与えてもらってはいたが、まだ人前で話すことが得意とは言えなかった。このプログラムでは、ディベートやシミュレーション・ミーティングなどの人前で話す機会がたくさんある。これを機に、人前で話すことを得意にしたいと思い、参加することとした。

最後に、③についてである。③については、二つの観点から述べる。まず、このプログラムには、英語を母語としない複数の国の学生が集まる。英語を母語としない人々は、英語のネイティブスピーカーよりも多いため、実際に国際社会に出た際に、英語を第二言語とする者同士でコミュニケーションをとる確率の方が高いと思われる。そのような意味で、英語を母語としない複数の国の学生が集まる、というこのプログラムの状況は現実即しており、ネイティブスピーカーとコミュニケーションをとるのはまた違った学びが得られるのではないかと思い、参加したいと感じた。そして、もう一つは、純粋に英語を使いたかったからである。日本にいと、英語と話すという機会はありませんため、書く読む聞く、の勉強に

偏りがちである。しかし、国際社会にでるときに、英語でコミュニケーションをとれなくては意味がない。自身の英語力アップのために日本人が少ない環境で英語漬けの日々を過ごしたいと感じたため、参加を希望した。

以上の理由から、私はリーダーシップチャレンジ in 台湾に参加することとした。

2. 研修内容

このプログラムには様々なコンテンツが含まれており、一週間が飛ぶように過ぎていった。主なものについて順に、感想を交えつつ述べていきたい。

一日目は、My Leadership Dream、アイスブレイクと、新堀江商圈でのショッピングだった。My Leadership Dream では自分あてに、リーダーシップに関しての考えや、なぜこの研修に参加したかなどについて書いた手紙を書いたり、自分の夢を絵で表現したりした。絵で何かを表現し、人に伝えるというのは新鮮だった。絵で描いてある分、どんな夢なのかが分からないこともあったため、質問を投げかけることが多く、自然と会話が始まっていくのが良いなと感じた。アイスブレイクでは、身体を使うアクティビティが行われ、会話を交えつつ身体を動かすことで、学生間の距離を



ぐっと距離を縮めることが出来たように思う。ショッピングは、単なるショッピングなのかと思っていたが、目的のものをグループで探さなければならず、チームワークが要求された。

二日目は、Student-led Activities、シミュレーテッド・ミーティングの準備にあたっての授業、餃子づくりだった。Student-led Activities では、それぞれの国の学生が学校単位でリーダーシップに関係するアクティビティを行うというものだった。私たち愛媛大学生は、コミュニケーションや協力、目標を具体的に定めることの大切さを伝えるためのアクティビティを実施した。グループをファシリテートすることに関し



て、時間管理が甘かったりと、私に至らない点があったため、しっかり反省しファシリテートについてもっと学びたいと感じた。他の日本人メンバーの事前準備や協力のおかげで、アクティビティは大変な盛り上がりで、様々な人から高評価をいただいた。他国の学生のアクティビティも個性に溢れていて、どれも興味深かった。シミュレーテッド・ミーティングの準備にあたっての講義では、どのように議論を進めたらよいか、などを学んだ。良い議論を実際に動画で見て、話しやすい雰囲気を作ることの重要性を学ぶことが出来た。しかし、英語の理解が追い付かず、学び取れたことが少なかったため、英語力をもっと高めていく必要があると痛感した。餃子づくりでは、今まで話せなかった学生と和やかに話しながら、料理

を楽しむことが出来た。

三日目は、シミュレート・ミーティング、ディベートについての授業、リーダーシップスキルワークショップ、キャンパスツアーだった。私はシミュレート・ミーティングでは事前準備のみで、話すことはなかったが、他の学生の議論を聞くのもとても勉強になった。会議に参加する全員が納得できるような結論を時間内に導き出すのはとても大変そうで、話をまとめる技術を身に着けることの大切さを学ぶことが出来た。リーダーシップスキルワークショップでは、形がバラバラの紙切れを組み合わせる三つの同じ大きさの正方形を作るというアクティビティをした。これは二段階に分けて行われ、第一段階では一言も言葉を発さずに行い、第二段階では言葉でコミュニケーションをとることが出来た。言葉でコミュニケーションをとった方が早く正方形を作ることが出来、言葉でのコミュニケーションをとることの大切さを学ぶことが出来た。キャンパスツアーでは、高雄科技大学のキャンパスを巡りながらリーダーシップに必要なことを学ぶことが出来た。有名な映画の設定を用いて行われるのがユニークで、楽しむことが出来た。

四日目は、主にディベート、カルチャーナイトだった。

授業中に表情を認識するシステムを導入することの是非をテーマに、ディベートを行った。登壇し、拙い英語ではあったもののグループの意見を述べる事が出来た。しかし、ともに登壇したメンバーが質問に対する返答に困っていた時に手を差し伸べられなかったことが大きな心残りとなった。自分のことで精一杯でメンバーに対して気を回せなかったもので、周りを助けることが出来るくらいの心の余裕と、英語力をつけたいと思った。カルチャーナイトでは、それぞれの国の学生が、祖国の文化をテーマにダンスや歌などを披露した。日本人メンバーは、日本のポップカルチャーである、アイドルのダンスを踊った。他のアジアの国々でも知名度が高いものを選んだので、コ



ールをもらいながら楽しく踊ることが出来た。他の国のダンスや歌は、どれもクオリティが高く、見ごたえのあるものだった。

五日目の主な活動は、コミュニティサービ斯拉ーニングとフィールドトリップだった。コミュニティサービ斯拉ーニングでは、台湾人の子供たちと他国のあいさつを学んだり、折り紙をしたりした。最初は堅かった子供たちの表情が、活動を重ねていくごとに柔らかくなっていった、最後は笑顔で話しかけてくれるようになったのが嬉しかった。(台湾語なので台湾人の学生に通訳してもらわないと全く理解できなかったが…)

フィールドトリップでは、美濃民俗村では、お茶づくりの体験をした。台湾の客家文化に触れることが出来た。



六日目の主な活動はフェアエルパーティだった。私のグループではダンスをすることになり、難しいところは自分たちでアレンジして簡単にするなど工夫を重ねた。劇をするグループもあり、それぞれのグループが個性豊かな出し物を披露した。フェアエルパーティの最後には写真がムービーで流され、今までの出来事を振り返り、思わず涙する人の姿も見られた。



七日目はクロージングセレモニーだった。ディベートやシミュレーション・ミーティングで活躍していた人たち、普段の生活の中でリーダーシップを発揮していた人たちが表彰された。私は表彰されることはなかったが、表彰された人を目指してリーダーシップを学びたいと感じた。クロージングセレモニーが終わった後は別れを惜しんで写真を撮りあった。



3. 研修全体を通しての学びと感想

私は研修終了後にできるようになっていたこと三つを掲げて、この研修に参加した。

- i. 人前ではきはきと発言できるようになっていること
- ii. 自ら議論を進めることが出来るようになっていること
- iii. 多面的な視点から物事を考えることが出来るようになっていること

上記三つが目標である。i においては、ディベートで登壇し、人前で過度に緊張することなく落ち着いて話すことが出来たというのは、自分にとって大きな進歩だと感じた。しかし、英語で話すことに慣れていないため、抑揚をつけたり感情をこめたりするのが難しく、聴衆に語り掛けるというよりは、原稿を淡々と読み上げるような形になってしまったのが課題だと感じた。英語でも日本語でも、聴衆に語り掛けるようなスピーチが出来るように、人前で何か話す機会を自ら見つけて、自分の弱点を克服したいと思う。

ii についてである。私は誰かが話をするのを待ってから発言することが多く、自分から発言をし、議論を進めていくということはやったことがなかった。しかし、リーダーシップを発揮するためには、人に意見を求められる前に発言することも必要であると感じ、実践することにした。当初は英語が上手く話せないという抵抗感から、なかなか発言することが出来ずにいたが、メンバーに、英語で話すことを怖がらずに自分の意見を伝えてほしい、といわれたことから、自分の意見を下手な英語であってもどうにか伝えなければと思うようになった。自分の意見をどうにか伝えようという私の思いが伝わったのか、周りも私の発言にしっかりと耳を傾けてくれるようになり、より話しやすくなった。その結果、人に意見を求められる前に意見を言うことが出来るようになり、議論を進めることが出来るようになった。拙い英語だったので、聞き手は理解するのに苦労したこともあっただろうが、最後まで真剣に聞いてくれてコメントをくれたことが、とても嬉しかった。このことから、自分から意見を言うことの大切さと同時に、人の話を真剣に聞くことの大切さを知ることが出来た。話を聞く、ということに関して、他の日本人メンバーから、私は人の話を聞くときにリアクションが薄いことがあり、リスナーズエクスペリションをもっと鍛えたほうがよい、という指摘を受けた。私としては、合相槌をうつなどはしているつもりだったのだが、他人からみたら

そうは見えなかったのだな、と反省した。リスナーズエクспRESSIONを多様にして、話しやすい雰囲気を作ることに努めようと思う。自分の意見を聞いてもらって、それに対してメンバーが良いところをまず言ってくれていたのが、自分のグループの雰囲気が良かった要因だったと思うので、人をほめる、というリスナーズエクспRESSIONのレパートリーを増やしていきたい。他人から指摘されて自分の課題が初めてわかることもあるので、これからは積極的に他人の意見を求めていこうと思った。仲間同士でクリティカルに意見を言い合うことで、自分を成長させていきたいと感じた。

iiiについては、具体的に言うと、外国の人々の考え方や文化を知り、視野を広げる、ということだ。台湾人、タイ人、インドネシア人とかかわる中で、特に印象に残ったのが、インドネシア人の学生が歴史にとっても詳しく、どの国の学生たちも自国の伝統文化を英語で表現できていたことだ。インドネシアの学生と話した時、日本と関わりのある歴史的な出来事は私は分からなかった。世界史はきちんと勉強した方が良く、常にごろから大人たちに言われていたが、受験のための最小限の勉強しかせず、受験が終わるとすぐ忘れてしまうくらい私は世界史に関して関心がなかった。しかし、世界の人と話するとき、歴史を知っておくと会話の幅を広げることが出来ると実感し、世界史を学び直したいと思うようになった。そして、日本の伝統文化について聞かれたとき、英語でどう言ったらいいのか分からない、日本人であるにも関わらず日本の文化自体が分からない、ということがあり、少し恥ずかしさを感じた。自国の文化を理解したうえで、他国の文化について学ぶことで、日本の良さ、他国の文化の良さがより分かるようになるのではないかとも思うので、自国の文化に関心を持ち、海外の人たちに聞かれたらきちんと答えられるようにしたいと思った。

私はこの研修を通して、リーダーシップに関わるだけでなく、国際社会を生きていくためにこれからどのようなことを学んでいけば良いのかも知るが出来た。研修で学んだことや研修を経て見つかった自分の課題を忘れないうちに、本を読むなどの座学はもちろん、留学や国内でのリーダーシップ研修などの学びの場に飛び込んでいくことで、自分を成長させていきたい。

4. 終わりに

全てが英語で行われるこの研修では、言語の壁によって心が折れてしまいそうなこともあった。しかし、英語が堪能であることが必ずしも重要なわけではなく、自分の意見を言おうとする姿勢が大切だということを、身をもって実感した。そして、発言するだけでなく、人の意見にしっかり耳を傾けることの大切さ、そのような人たちがいてくれることのありがたみを感じる事が出来た。リーダーシップに欠かせない力の一つである、話すことと聞くこと、座学と実践両方の面から向上させていきたい。